第十四章

結　婚

――結婚という矛盾に満ちた関係――

木村　晶子

ジョン・フレデリック・ベーコン『結婚式の朝』（1892年）

「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどこもその不幸のおもむきが異なっているものである」というトルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭のとおり、ギッシングの作品には様々に不幸な家庭が描かれている。十九世紀末の英文学においては、既に結婚は幸福な結末ではなく不幸の始まりであり、家庭は「家庭の天使」である妻や母に守られた安息の場ではなく、家父長制の矛盾があらわになる場であった。オースティンの作品から百年を隔て、結婚が金銭に支配されることは変わらないものの、オースティンの人物にとって期待と希望の指標だった年収は、ギッシングにおいては欲求不満と失望の指標となる。また、結婚生活の不幸だけでなく、結婚できない者の不幸も様々であり、収入不足で家庭生活が望めない男や結婚相手を探す機会すらない「余った女」も登場する。結婚が幸福をもたらさないとしても、結婚できないこともまた、不幸の源なのである。

本稿では、ヴィクトリア朝における結婚について概観した後、とくに女性問題を主題にした一八九〇年代前半の三つの作品、『余計者の女たち』、『女王即位五十年祭の年に』、『イヴの身代金』を取り上げ、ギッシングの結婚観や家庭像を探ってみたい。

第一節　ギッシングの女性問題小説の背景

「現在の結婚という形式は、伝統的価値観に従うほど、悲惨な失敗となる」と、一八八八年の「結婚」と題された雑誌論文で、モウナ・ケアドは結婚制度の原点をルターにまで遡って論じ、激しい論議を呼んだ[1]。自己犠牲と奉仕の精神を植えつけられて何世紀も家庭に閉じ込められた結果、活力も才能も奪われた女性が結婚生活を不幸にするというケアドの主張は、「新しい女」の問題意識の根本を明らかにした[2]。また、前年の「結婚は失敗か？」という記事でもケアドは同様の主張をし、読者から二万七千通が寄せられる反響を呼んだという[3]。ギッシングが一八九〇年代に女性問題を取り上げた背景には、結婚制度自体に異議が唱えられ、女性問題が社会論争となった十九世紀末特有の状況があったのである（図①）。

辿ってみれば、一八五〇年代にも、個々の啓示を重んじる心霊主義に端を発した自由恋愛を称揚する動きが反結婚運動として発展したものの、保守化する社会の中で、社会主義とひとくくりにされて攻撃の的となる経緯があった（Perkin 218-19）。「飢餓の四〇年代」が過ぎ、経済的繁栄を迎える五〇年代以降はむしろ性道徳が厳しくなり、正規の結婚が重要視されるようになる[4]。結婚が女性の義務とされると同時に、結婚の法制改革を求める動きも目立ってくる。五十年代には、職業をもつ女性全体の四分の一にあたる七十五万人以上が既婚者で、彼女たちが自分の財産をもてない結婚制度が問題視され始めたのも当然のことだった[5]。

実際、十九世紀半ばまでの英国の結婚制度は、中世以来のキ

図①　「結婚は失敗か？　たいていは――YES!」『イラストレイティッド・ポリス・ニュース』（1891年4月4日号）

リスト教道徳に基づいた社会基盤であると同時に、圧倒的に女性に不利なものだった。正式な結婚には、一七五三年以来、国教会の儀式と結婚予告が必要だったが、一八三六年から非国教会にまで結婚認可の権限が広げられ、戸籍登記所での民事婚も可能になった。とはいえ結婚は、配偶者の死によってしか解消できない場合が殆どで、一八五七年の離婚法成立以前の離婚に要する費用は、庶民には手の届かないほど高額で、夫は妻の不貞を理由に離婚できても、夫の不貞は妻からの離婚理由にならず、夫から虐待されても別居しか許されないことが多かった。[6] また普通法のもとでは、既婚女性は夫の付属物として扱われ、独立した経済活動はできず、財産は夫に管理され、遺言も夫の同意なしには作れなかった。[7]

一八七〇年代以降、フェミニストの努力もあって、こうした不均衡を正す法律が次々作られる。一八七〇年、八二年の既婚女性財産法により、女性は結婚後も独立した財産権を獲得し、一八七三年、八六年の児童保護権法により、離婚後の親権保持が有利になった。[8] 中でも、八二年の既婚女性財産法改正は「女性解放運動史上の画期的事件」とされ、五〇年代からのフェミニストの闘いの勝利として、現実的な女性の権利拡大だけでなく、世間に与えた心理的影響も大きかった。[9] また、既婚女性の権利向上に伴い、参政権や教育・雇用の機会拡大を求める声も一層高まる。こうして、八〇年代後半には女性の権利意識が一段と高まり、のちに「新しい女」として既成の性道徳規範を拒絶する、自立した強い女性像が脚光を浴びる舞台が整っていったのである。

また深刻だったのが、適齢期の男性より女性が多いという女性過剰の問題だった。乳幼児期の男児の死亡率の高さが主因だが、中産階級の家庭を営むためには一定の財産が必要だったこと、[10] 独身男性が植民地に赴き、軍隊に加わったことも要因だろう。男女数の不均衡は、一九一四年まで拡大の一途をたどる。

既に一八七一年の時点で、男性の数を一〇〇〇とすると、それに対する女性の数が一〇五三だったが、九一年には女性が一〇六一となる。具体的には、十五歳から四十四歳の女性が男性を上回る人数が、八一年に三十六万九千人だったのが、九一年には四十七万九千人に達し、十年間で十一万人も増加するのである。[11]

結婚しない限り、最低の生活水準すら保てない労働者階級への影響も当然あったが、女性過剰の弊害は中産階級で顕著だった。[12] ある郊外の裕福な地域での一八九二年の調査によると、三十五歳から四十五歳の独身女性の数は独身男性の三倍で、その内使用人階級は三分の一だけだったという（Lewis 4）。ヴィクトリア朝においては、結婚こそ女性の義務であり、特に中産階級では「家庭の天使」が女性の使命だったにもかかわらず、現実に結婚できる女性の割合は下がる一方だったのである。こうした中で、女性が良妻賢母とは別の生き方を模索したのも当然であり、結婚をめぐる状況はますます矛盾に満ちたものとなった。

第二節　結婚という不公平な関係

このような世紀末の社会の現実を克明に表した『余計者の女たち』（一八九三年）は、九〇年代に次々と出版された「新しい女」の小説とされ、結婚しない女や結婚できない女、また結婚生活に満足できない女の現実を描いている。主人公ローダ・ナンは、女性の職業訓練所で働く急進的フェミニストで、「大抵の男には道義心がないため、結婚によって男に縛られることは恥辱と不幸」（第十章）と考え、結婚しない決意を固めている。「止むなく受け入れる運命としてではなく、自らの選択する生き方として、独身を通そうとするヒロインの『新しさ』は、いくら強調しても強調しすぎることはない」と指摘されるように、ローダは真っ向から「家庭の天使」の理想像を拒否する革命的ヒロインなのである。[13]

しかし皮肉にも、エヴァラード・バーフットとの恋愛関係が深まると、自由恋愛による同棲生活を提案する彼に対し、正式な結婚を望んだのはローダだった。のちのD・H・ロレンスの作品を予告するかのように、男性の征服欲と女性の使命感の衝突は、恋愛を支配欲の闘いと化す。一度はローダの意志が勝って婚約が成立するものの、エヴァラードとモニカ・マドンの仲をローダが誤解することで、ふたりは仲違いしてしまう。結局ローダは、フェミニストとしての独身の人生を改めて選択するのだが、彼女が次第に自らの女性性を意識する過程には、結婚こそなおも究極の愛の形である可能性が窺える。

実際、結婚生活の経済的、精神的安定の価値は、結婚できない不幸を見れば明らかである。不倫の恋のために職業訓練所を去り、結婚できずに自殺するベラ・ロイストンや、売り子から街の女となるミス・イードは、結婚という王道をはずれた「堕

ちた女」の運命を示している。また、父の死後、結婚の望みもなく極貧生活を送るモニカの姉たちは、当時注目された、親の死後困窮する中産階級の女性像の典型であろう（Vicinus 23）。若く美しいモニカは、一日十数時間労働の服地屋の店員を辞め、ローダの職業訓練所に入るものの、職業婦人として自活する意志も能力もなく、姉のような生活をするなら自殺した方がましだと感じ、年収六百ポンドに惹かれて二十歳も年上の男と結婚するのである。モニカが特別に打算的だった訳ではなく、女性向きの上品な仕事に見えながら（あるいはそれゆえに）供給過剰で労働条件が劣悪だった女性店員にとっては、結婚によって職場を去ることが夢だったという[14]（図②）。

また、結婚できない男の不幸も見逃せない。数学の個人教授トマス・ミクルスウェイトは、婚約者がいるにもかかわらず、収入不足のため十七年間も結婚できない。モニカの夫エドマンド・ウィドソンも、事業に成功した弟の遺産を得るまでは結婚できなかったわけであり、中産階級の結婚における資産の有無の重要性がわかる。

しかしまた、ウィドソンとモニカの結婚生活も惨めな失敗でしかない。「好きなように生活していいと保証してくれた」（第十一章）ウィドソンは、結婚後は専制的な夫となる。「妻が家庭内の務めとは別の権利や義務をもつ、独立した個人だとは思いもよらない」（第十五章）夫との生活に嫌気がさしたモニカは、「自由」がほしいと夫に訴える。

図②　『パンチ』（1877年6月16日号）
洋品店主「どうしてあのご婦人は何も買わずに出て行くんだ？」
売り子「お気に入りのものがなかったんです」
洋品店主「いいかい、お前さん、お前さんを雇ってるのは、この店にあるものを売るためで、お客の欲しいものを売るためじゃないんだよ！　わかったか！」

「自由？」夫はモニカをにらみつけた。「そんなことを言うと、おまえが僕と結婚しなければよかったと後悔しているのかと思うよ」

「後悔するとしたら、私を家に閉じ込めて、好きな所にも行かせないほど疑っていると思わせるからよ。たとえばある日の午後に、シティーのあたりをぶらつきたい、気楽だから、ひと

りで出かけたいとあなたがお思いになったとして、それを禁じたり文句を言ったりする権利が私にある？　それなのにあなたは、私がひとりで出かけようとすると、どんな所だろうと、ひどく不機嫌になるのよ」

「いや、それは話が違うよ。僕は男だよ。おまえは、女なんだから」

「それで何がどう違うのか、わからないわ。女だって、男の人と同じように自由であるべきだわ。でなければ、おかしいわよ。家の中の仕事を終えたら、私だってあなたと全く同じように自由になれるべきだわ、全く同じにね。エドマンド、真実の愛を失いたくないなら、絶対に、自由を認めるべきなのよ」

（第十六章）

モニカは、若く美しい妻をもつ夫の不安を理解せず、夫の旧式な価値観に反発して、彼女に惹かれる青年ビーヴィスとの不倫の恋に生きようとする。ところが、モニカが夫のもとを去って駆け落ちする決意をした途端、ビーヴィスは逃げ腰になる。彼が人妻との恋愛遊戯だけを求めていたことを知り、モニカは絶望するが、夫との仲は最早修復できず、別居したまま夫の子を産んでまもなく亡くなってしまう。ウィドソンは、妻の不倫関係を疑い続け、娘を我が子として受け入れられず、モニカの姉たちに養育を任せるのである。

「新しい女」ロードが、恋愛の挫折を経て再びラディカルな主張を取り戻すとすれば、平凡な結婚を夢見たモニカは、結婚後に「期せずしてロードたちのすぐれた生徒」（第十六章）として「新しい女」の主張をしながらも、旧来の性道徳の枠組みに囚われたままである。ふたりのヒロインの生き方は対照的でありながら、いずれも安定した幸福な結婚生活とは程遠く、家庭は空虚な幻滅の場と化すのである。マイケル・コリーが指摘するように、ふたりの物語はまったく違うようでいて、共に複雑なセクシュアリティの心理的影響と理性喪失が描かれ、男女いずれにも相互理解や共感が欠けている（Collie, *Alien Art* 153-54）。結局、結婚を究極の愛の形とするには、あまりにもギッシングはリアリストだったのかもしれない。

『余計者の女たち』は、絶えずそれ自体の主張を覆す矛盾に満ちたテクストである。独身主義の物語かと思うと恋愛物語、フェミニズムの称揚かと思えば、家父長的規範が強調されるという、この作品自体の自己矛盾の指摘もある[15]。また、「家父長的イデオロギーの思想と実践に抵抗すると同時に、支配もされている[16]」という批評もある。実際、単一のイデオロギーや破綻のないプロットを成立させる楽観主義とは無縁のギッシングにとって、自由なはずの恋愛は、所有欲の修羅場や浅薄な遊戯となり、孤独と貧窮からの解放のはずの結婚生活は、男女間の絶望的な隔たりを表す牢獄となる。家庭は、苦い諦観をもたらす灰色の日常そのものとなってしまう。かといって、家庭をもてない者たちは、別の形で孤独で悲惨な人生を背負うのである。

こうした暗い結婚観を形成するギッシングの人物たちは、他者に共感も譲歩もしないながらも、強烈な自我を輝かせる生き方はできず、物質文明の中で空虚な日々を送るしかない。モニカの人生も悲劇的でありながら、真の悲劇の崇高さによって読者の心を打つことはないのである。旧来の価値観の中核をなす結婚制度と女性の役割の正当性がゆらぎながらも、それに代る理想的な形は見出せない。中産階級の妻の座に憧れて結婚するものの、恋愛小説を読みふけった挙句、不倫の恋に絶望するモニカは、マス・メディアの発達により、絶えず他者の欲望を真の欲望と錯覚させる現代文化の卑俗さを先取りしたヒロインと言えよう。夫の旧い考えに抵抗しつつも、その価値体系から抜けられず、大衆文化の幻想を求めたモニカの不幸な結婚からは、欲望そのものを陳腐な既成の欲望に変質させてゆく時代の変化が読み取れるのである。

欲望といえば、ギッシングの描く結婚においては、しばしば金銭欲が深い意味をもつ。頻出する年収や遺産の金額は、モニカの場合のように結婚の決め手となる。以下、『イヴの身代金』に視点を移して、金銭に焦点をあててギッシングの描く結婚を考えてみたい。

第三節　結婚という金銭関係

『イヴの身代金』（一八九五年）は、金銭と愛情、結婚をめぐる独特の男女関係の力学を描いた中篇である。バーミンガム近郊の機械製図工モーリス・ヒリアドは、下宿屋の女主人の娘の友人イヴ・メイドリーの写真を見て以来、淡い恋心を抱く。彼は思いがけず四百ポンドの財産を受継ぎ、仕事を辞めて「人間らしい生活」を楽しもうと決意し、ロンドンに出てイヴの居所を探しあてる。熟練労働者の週給が平均一ポンドだったことを思えば四百ポンドは大金だ（Vicinus 26）が、一時の贅沢を保証するものの豊かな結婚生活には不十分で、その金を使いきった後は再び「奴隷の生活」に戻ることをヒリアドは覚悟している。イヴとの会話からは、十分な財産なしには結婚を夢見ることすらできない状況が窺える。

「僕は結婚なんか望んでないよ。貧乏な結婚生活を、いやというほど見てきたからね」

「私もそうよ」と、イヴは、静かながらもきっぱりとした口調で言った。

「年収百五十ポンド以上稼ぐのは、一生絶対に無理だと男がわかっていたら――」

「そんな生活を共にするよう、女を口説くとしたら、犯罪だわ」と、イヴは冷たく付け加えた。（第十章）

イヴは、ヒリアドの金銭的援助によって既婚男性との面倒な関係から逃れ、パリ旅行にも同行するが、結局ヒリアドの愛情に

は応えずに、資産家ナラモアと結婚してしまうのである（図③）。

イヴと『余計者の女たち』のモニカには、共通点が見られる。医師を父にもつモニカに比べれば、イヴは労働者階級だが、共に若く美しく、ロンドンの華やかさに憧れて地方から出てくるものの、都会に溢れる贅沢を享受する身分にはなれない。それでも、彼女たちはロンドンの街をひとり歩きし、貸本屋の本を

図③　「必要最低限」『パンチ』（1872年5月18日号）
結婚相手は邸宅や領地などを所有していることが最低限必要だと話し合う未婚の娘たち。

読み耽って娯楽を求める。故郷では、母に先立たれ、酒に溺れた父に代わって一家を支え、控えめだったイヴが、ロンドンでは別人のように垢抜けていることにヒリアドは驚く。家族のために自己犠牲を続けたイヴが、自分の欲望を優先する女性に変化したのである。「家庭の天使」を理想像とする中産階級と違って、労働者階級の女性は夫の労働のパートナーとなり、持ち家や子供といった実際の生活の基盤を求めて結婚したという（Perkin 125-28）が、モニカやイヴにとっての結婚は、若さと美貌を資本に貧しさから脱出し、憧れの世界の一員となる手段だったに違いない。

ただ、イヴはモニカと違って「いつも不可能なことをしたがる」（第八章）好奇心と野心をもち、簿記やフランス語さえ身につけ、貸本屋から借りる本も、恋愛小説ではなく伝記や旅行記など様々な分野に及んでいた。イヴには、できあいの恋愛幻想を拒否する現実感覚と、富に裏付けられた教養をもつナラモアをも虜にする知的魅力があったのである。「堕ちた女」になりかねない状況からヒリアドに救われたにもかかわらず、彼の親友ナラモアと結婚するイヴからは、物質文化の繁栄においては、貪欲で非情な者こそが勝者となることが読みとれるかもしれない。

ヒリアドの恋の背景には、自分とイヴを重ね合わせ、貧しさゆえの「病」から救ってやりたいという思いがあった。パリ行きを提案したのも、彼同様イヴも「完全に環境を変え、過去の

重荷を捨て、休息と満足と楽しみの意味を知ること」によってしか治せない「長年の困窮と不幸による病」（第十二章）に罹っていると信じたからである。金銭的援助によって、イヴを現実の苦境から救うだけでなく、故郷の非人間的な工場地帯や都会の物質文明に毒されることから救おうとしたのである。

しかし、イヴの心の内は、貧困によって萎縮した高貴な精神とは異質なものだった。経済的ゆとりが、豊かな感性、ひいては人を愛する力を取戻すとヒリアドが期待したとすれば、イヴが求めたのは、愛の力など確かめる必要すらなくなる、さらなる経済的ゆとりそのものだったからである。イヴは、貧困の恐怖こそ自分の最大の弱点で、ヒリアドを愛せなかったのも、貧しい結婚生活は、貧しい独身生活の千倍も惨めに思えるからだと手紙で告白するが、ヒリアドには、その手紙すら計算づくに思える。モニカの悲劇が、不幸な結婚だけでなく、まやかしの不倫関係によってあらわにされた彼女の人生そのものの空疎さだったとすれば、イヴは、その空疎さを臆面もなく生きることで幸福を得る。「真実の愛」の問いかけなどとは無縁の鈍感さによってこそ、イヴは裕福な家庭生活を手に入れるのである。

それまでの多くの小説では、幸福な結婚はヒロインの成長や美徳によってもたらされた結末だったが、この作品ではヒロインの精神的成長はなく、イヴはむしろ精神性を拒絶することで幸せな結婚生活を手に入れる。男をうまく利用したヒロインといってしまえばそれまでだが、かといって『虚栄の市』（一八四七～四八年）のベッキー・シャープのようなあっぱれな悪女でもなく、単にヒリアドのお人よしにつけこんで利己的な選択をした程度のことである。ここでは、悪女が逸脱する道徳的規範そのものが最早機能せず、価値基準は金銭に換算され、ヒロインの逸脱は、単なる凡庸なスノビズムの一例に過ぎなくなる。「身代金を払ってくれた」（第二十七章）ヒリアドが、あえて彼女の愛を強要しなかったことに、イヴは深く感謝するが、「身代金」というイヴ自身のことばからは、金銭が人生を左右する手段であるどころか、彼女の存在価値自体が金銭によって置き換わることが示唆されている。彼女にとっての結婚は、最も高額で身受けされる契約でなければならないのである。

ディケンズをはじめとして、ヴィクトリア朝小説における金銭のテーマの重要性はしばしば指摘されているが、サイモン・ジェイムズは、とくにギッシングの作品において、個々の詳細な経済状態の描写が、環境と自我の関係を劇化する技法だと述べている。また、金銭あるいは金銭的欠乏が、繊細な自我を脅かす世俗的な力、個人の可能性実現の障害となる点も指摘している（S. James 30）。実際、ギッシングの世界での金銭はネガティヴな機能をもつことが多く、貧苦が夢を砕き、自我を矮小化するばかりか、ヒリアドのように財産を得る場合も幸福をもたらさない。彼は、束の間の自由人となってイヴを経済的に援助できても結婚はできず、むしろ財産の不十分さが強調される結果となる。この作品での金銭は、快適な生活の物質的基盤では

なく、消費文明における欲望を肥大させ、手に入れたはずの幸福を遠ざけ、挫折や苦悩の源として、欠乏を顕在化する装置となるのである。

ヴィクトリア朝末期の物質文明の繁栄の中で、こうした金銭の意味の変化の根底には、俗化する世間と道徳性の喪失に対する辛辣な視線が感じられる。一八九二年のギッシングの手紙は、女性を主要人物にした「卑俗さの研究」としての作品構想に言及している（*Letters* 5: 11）が[17]、確かに、この頃の作品では新たな都市文化における女性の低俗さが強調されている。不倫の罠に陥るモニカや恋愛小説と酒に溺れるモニカの姉のように、女性たちはなんらかの形で旧来の性規範を逸脱し、都会の娯楽を享受する。ヴィクトリア朝の道徳観が女性の自己犠牲を要求し、それを理想化することでさらなる家庭への奉仕を義務化したとすれば、イヴが妻の座を勝ち取る過程は、こうした犠牲的精神とは相反するものである。その意味でイヴは、あえて結婚を選ぶことで、「新しい女」とは別の戦略で「家庭の天使」の精神性を拒否したと言えるかもしれない。

このようなイヴが、ヒリアドの犠牲に値しない女であることこそ、この作品の真意だとギッシングは語ったそうだが、その背後に彼自身の女性に対する失望を無視することはできない（Korg 198; Haydock 37-124）。ギッシングは、売春するほど貧しい娘メアリアン・ヘレン・ハリソンに恋をし、彼女を救うために大学で窃盗の罪を犯して、逮捕され放校処分となり、アメリカに渡った。一年余りで帰国し、二十一歳で彼女と結婚するものの、小説家として自立できなかった経済的困窮に加え、彼女のアル中や病気のため、結婚生活は無残な破局を迎える。ギッシング特有の、社会の底辺の女性を救いたいというヒロイズムが、イヴを援助するヒリアドの人物像に投影されているとも考えられる。

最初の妻の死から三年後、三十三歳のギッシングが再婚したイーディス・アンダーウッドもまた、労働者階級出身だった。しかし、恋愛というよりは性的欲求からの結婚であり、知的な隔たり、相容れない精神性によって、この結婚もまた悲劇的なものだった。「すぐに最悪の人間性を露呈することになった、魅力のない無教育な無産階級の娘との結婚によって、彼は、昔からの友人関係を保つことはおろか、新しい交友関係すらあきらめた」（*Letters* 5: 36）ほど、妻との生活は、彼の人生を暗くした。さきに、ギッシングの人物の共感する力の欠如を指摘したが、彼の二度の結婚生活においては、いずれの妻とも共感する接点など皆無だったかもしれない。のちに精神病院で亡くなるイーディスは、結婚直後から癇癪を起こし、召使との争いも絶えず、子供にも愛情をもたず、すでに一八九四年には、ギッシングは妻との関係に絶望していたという（Korg 199）。

『イヴの身代金』の結末では、ヒリアドは、ひとり田舎の美しい自然の中で「自由人」として「生の喜びの歌を己に歌う」（第二十七章）ことになる。最早、女性を伴侶とする欲求もなく、

孤独こそが喜びとなる結末は、当時の作者自身の妻への嫌悪感によるものであり、この作品は、むしろヒリアド自身の「身代金」を描いたものだ（Halperin 208）という指摘もある。また、イーディスの人間性に対する絶望が、労働者階級そのものに対するギッシングの感情にも影響を与えたことも想像に難くない。ギッシングにとって、家庭は、安らぎと愛の空間とは程遠い、苦悩と失望の場となっており、さらに幼い息子ウォルターの存在が、問題を一層深刻にしていた。最後に、家庭における子供の存在が大きな意味をもつ作品、『女王即位五十年祭の年に』を通して結婚を考えてみたい。

第四節　結婚という理想的関係

『イヴの身代金』とほぼ同時期に執筆された『女王即位五十年祭の年に』は、題名どおり、ヴィクトリア女王即位五十年目の一八八七年のロンドンが舞台だが、帝国の繁栄を象徴する年にもかかわらず、作者にとっては「俗物根性、騒々しい衆愚政治、数えきれない膨大な偽物、すべてが一緒くたになった、人間の愚劣さのあらわれ」（*Letters* 5: 229）を示す年だった。彼は、大量生産と大衆教育の時代特有の低俗さを表わす下層中産階級を意図的に「選んだ」ことを強調し、既に飽きられている「女性問題小説」と見られたくないとも述べている（5: 229）が、[18] やはり結婚が重要なテーマである。また、アーサー・ピーチーやナンシー・ロードの親子の絆を通して子供を含む家族関係も描かれている。因みに、十九世紀半ば以降、上層中産階級を中心に各家庭の子供の数が減少し続け、平均六人だったのが、一九〇〇年には三、四人に減少する。[19] この作品でも、フレンチ家は三人姉妹だが、子供が登場する場合は、いずれも乳幼児ひとりという家庭である。

主人公ナンシーは、今回取り上げた作品の中で、最も家庭婦人にふさわしい女性となり、この作品から作者の理想の家庭像が想像できるのである。ナンシーは、資産家の息子タラントと恋に落ち、密かに別居結婚するが、父ロード氏はタラントの存在すら知らず、娘の軽率な結婚を恐れて、二十六歳まで彼女が独身で家に留まらないと遺産の権利を失うと遺言して亡くなる。前節で金銭のネガティヴな表現に言及したが、ここでも、豊かさを保証するはずの遺産が逆に生活を束縛し、ふたりは結婚を隠さねばならなくなる。作品冒頭のナンシーは、中途半端な教育で浅薄な知識とプライドだけを身につけた娘である。五十年祭の夜には、「ご自慢の『教養』とやらはこの熱気の中でどこかへ消えてしまった。自分の顔を見ることができたら、その下品な恍惚状態に自分でもぞっとしたはずだ」（第一部第七章）と、軽薄さが強調され、科学書を愛読するふりをして教養をひけらかし、タラントの誘いに応じて身を任せてしまう。また、彼女同様、女学校に通って「粗野で下品な台木に接木したような、似非お嬢様教育の産物である独特の話し方」（第一部第二章）

をするフレンチ三姉妹は、さらに救いようのない愚劣さを示す。一番下のファニーと結婚したいと打ち明ける息子ホレスに対し、父ロード氏は激しく女性批判を展開する。

「……近頃じゃあ、どこを見たっていかさまと屑ばかりだが、中でも最悪なのは、下品で派手な娘たちだ。そこら中で、身分が高いのも低いのも自分のことを『レディ』と言い張って、まっとうな女にふさわしい仕事なんかできないと抜かしよる。田舎でも都会でも同じことだ。教育を受けているだと、ああ、そんな娘たちは教育を受けているだろうよ。その教育とやらで一体どんな妻になれるんだ。どんな母親になれるっていうんだ。そのうち、家庭なんてなくなるよ。……」　（第一部第五章）

事実、虚栄心と物欲そのもののファニーは、ホレスの人生を破滅に導き、一番上の典型的悪妻エイダは、「おとなしい牝牛の方が安心して息子を任せられる」（第四部第四章）ほど、母親としても失格である。夫のピーチーは家庭生活に絶望し、幼い息子を連れて家を出て「最高に穏やかで幸福な生活」（第六部第一章）を過ごすが、エイダの騒ぎに負けて、結局は元の鞘に収まってしまう。「彼の階層では、結婚の幸福など珍しいもので、大抵は、責任感や家庭の義務の観念も、質素な喜びを愛する気持も、宗教心もない妻が、不幸の源である」（第四部第四章）という、諦観そのもののピーチーの結婚観は、同じ境遇だったギッシング自身の想いを反映しているだろう。

次女ベアトリスもまた、良妻賢母とは程遠い女性だが、姉や妹と違って男性に依存する生活を選ばず、ファッション関係のビジネスを立ち上げる。ナンシーに想いを寄せるラックワース・クルー同様、彼女は、大きく変化する社会の中で、大衆の欲求をつかむ抜け目ない人物として描かれる。夫に棄てられたと思ったナンシーが、仕事探しの援助を求めたのはベアトリスであり、ナンシーは上品な話し方を武器にベアトリスの店の顧客担当を務める。ベアトリスは、『余計者の女たち』のローダのようなフェミニストの主張ももたず、ただ金儲けを目指しているが、ローダとは別の形で、結婚せずに経済的自立を実践する逞しい女性なのである。

ただここで注目したいのは、経済的繁栄が絶えず、見かけだけの空虚さと結びついていることである。ベアトリスの店で必要とされる、ナンシーの「レディ」の外見と話し方、大衆の目を引くファッション戦略、ロード氏の成功のもととなった中産階級のゆとりを誇示するピアノ、クルーの広告業やレジャーなど、この作品では、ものの実体よりも外見が重要な消費社会の一面が鮮やかに描かれている。さらに、主婦としては名ばかりのエイダ、怪しげな交友関係をもつファニー、叔母と称して息子に近づくダムレル夫人、そして結婚や子供の存在を隠すナンシーも含めて、ここに登場する人物たちは、家庭生活においても見かけと実体の違いを何らかの形で示している。かといって、

ギッシングの世界においては、見かけの虚偽に対抗する本物や純粋さがあるかどうかは疑わしい。ホレスの恋心、ダムレル夫人の息子への執着など、愛情はあっても崇高な精神性は感じられず、利己的欲望が際立ってみえるだけである。

そのような中で、ナンシーの精神的成長は注目に値する。マリア・テレサ・キアラントは都市と女性の関係を考察し、『余計者の女たち』のモニカ、『イヴの身代金』のイヴ、そしてナンシーは同じタイプのヒロインで、自分の環境に満足できず、階級やジェンダーの境界を越え自立を目指しながらも、結局は未熟さや理想主義によって伝統的枠組に適応せざるをえなくなると述べる（Garland 55-56）。確かに彼女たちは、大都会の雑踏をひとり歩きして行動力を示す点で、英文学でも新しい系譜のヒロインである一方で、男性の視線を受ける性的対象となる危険も表し、性規範からの解放を示唆しながら、男性優位の枠組を出ることはない。しかし、ナンシーがモニカやイヴと異なる点は、出産後、母となることで明らかに前半の浅薄さとは違う精神性をもつことである（図④）。

ナンシーの主体性に関しては、フェミニスト的視点から、語りや文体の考察もなされている。モリー・ヤングキンは、この作品が女性の自立を十分描いていないとはいえ、語り手の自然主義描写がヒロインの内面の表出を妨げず、『余計者の女たち』に比べ、男性の視点だけでなく、描出話法による女性の視点が多いと指摘している[20]。モニカの場合は、内面描写にも作者の皮肉な視点が感じられ、出産を経て亡くなる最後の部分では、主体としての描写が皆無のまま、モニカの想いは読者に表現されることなく作品から姿を消してしまう。また、『イヴの身代金』では、ヒリアドに視点が固定され、イヴの内面は描かれず、謎めいたヒロインとしてヒリアドを翻弄し続ける。それに比べ、例えば次の場面では、ナンシー自身の視点から、子供への愛情

図④　サー・ウィルアム・クィラー・オーチャードソン『マスター・ベビー』（1886年）

をとおした「精神的成長」が語られている。

しかし、ナンシーは自分の精神的成長に気づかなかった。夫への関心を失ったと信じていたものの、憎しみを感じないのが不思議だった。命を与えた小さな存在にすべての感情を使い尽くしてしまったかのようだった。元気な男の子で、すでに母と乳母の違いがわかり――と、彼女には思えたのだが、彼女に抱かれると格別に嬉しそうに喉を鳴らした。妻であろうとなかろうと、あらゆる母の特権は彼女のものだった。虚弱な赤ん坊だったら、これほど大きな慰めを感じずに自分を責めもしただろう。しかし、生まれたその日から、この子はあまりにも強い生命力を示し、乳にむしゃぶりついて、蹴ったり叫んだりして抗いがたい自己主張をしたので、母としての優しさばかりか誇りすらも感じられるのだった。「ママの立派な坊や！　私の息子！」――初めてのすばらしい言葉、口にすると蜜のよう、耳には歓喜の響き。今まで人間が口にしたことのない言葉によって霊感を与えられたかのように、ナンシーはそう呟くのだった。

（第五部第一章）

このように、母としての喜びによってナンシーが精神的成長を遂げる背景には、家政婦メアリ・ウッドラフの存在が大きい。ロード氏は、有能で実直なメアリを、使用人ではなく家族の一員とすることに決め、メアリは、ロード氏の死後、結婚も出産も隠さねばならないナンシーを支え続ける。ここでは、ギッシングの世界には珍しく女性同士の永続的信頼関係が描かれ、「最もすばらしい自然現象――無教育なのに、下品でも愚かでもない」（第六部第三章）メアリの確かな現実感覚は、フレンチ姉妹らの女性教育の虚しさを浮き彫りにする。

しかし、ナンシーの「成長」は、結局、平凡な良妻賢母になることだったのではないだろうか。この作品の批評を見ても、『余計者の女たち』のローダのような自己実現を求めたナンシーが従順な妻となる「弱さ」への失望（Poole 196-97）、抑圧された女性の自由への希求が伝統的価値観で終わる不満（Sloan 134）がある。[21] 事実、仕事を探すナンシーの自立心も、結果的にはタラントの情熱を呼び覚ますだけである。「別れたために、改めて口説き、改めて彼女を征服せねばならなくなったのが嬉しく思え、彼の胸は熱かった」（第五部第八章）とあるように、自立を目指す彼女の冷たい態度は、かえって彼の愛情を掻き立てる。最終的にはふたりは夫婦の絆を取戻すが、「新婚の一年が過ぎても、同じように夫に愛され続ける妻は五万人にひとりもいない」（第六部第三章）と考えるタラントは、幸福な家庭の秘訣は別居結婚だとして下宿住まいし、気が向くときに妻子の家に戻るのである。

同居を求めながらも、「どんな女性をも美しく見せる表情、つまり、感情的にならずに静かに同意する表情」（第六部第三章）を浮かべてタラントの希望に沿うナンシーに対して、タラント

は歓喜に浸り、精神と肉体の強さにおいては自分が勝っていると主張する。「結婚している恋人たち」（第六部第三章）と表現される微笑ましい関係は、ナンシーが自分の意見を言いながらも、結局はタラントに譲歩することで保たれるのである。

母となった諦観が彼女の「成長」の根底にあることは、メアリとの会話でわかる。結婚した女性は、夫や子供の奴隷になって次世代の犠牲になるのが「自然の摂理」で、頭を使う仕事より育児の方が大事だと、いやでも信じるしかないと、ナンシーはメアリに語る。かといって、ナンシーは「それが不満だという調子ではなく、この上なく穏やかで哲学的な境地にいるよう」（第六部第三章）で、女性の幸福は、必然的に知的欲求を断念することなのである。大学入学を志して猛勉強するジェシカ・モーガンが、ナンシーと対照的に、精神のバランスを失うグロテスクな女性として描かれるのを見ても、女性の頭脳労働が自然に反するという当時の通念が窺える。[22]

実際、ナンシーが苦労して書き綴り、出版を希望した自伝的小説は、タラントの忠告で「一番人目につかない引き出しの奥にしまう」（第六部第五章）老後の楽しみになってしまう。育児という大切な仕事をしている以上、薄汚い争いにまみれた出版界に足を踏み入れる必要はないというのがタラントの理屈である。まさに、二十世紀フェミニズムで注目される「葬られた女性作家」の典型例だが、ギッシングはナンシーの失望を描きつつも、その小説が埋もれた傑作であるような書き方はしていない。同年に出版されたモウナ・ケアドの『ダナオスの娘たち』における、音楽的才能と主婦としての役割の葛藤や、創造力を殺して生きるヒロインの苦悩と、ナンシーの文学志望の挫折は比べものにならない。ギッシングの『渦』（一八九七年）のヒロインの場合も、音楽への情熱よりも人に評価されたい気持が勝っていたが、ギッシングの世界では、創造力をもちながら現実に打ちのめされるのは男性の特権あるいは悲劇であって、女性のものではないのである。

『余計者の女たち』では結婚生活そのものには希望がなく、『イヴの身代金』の結末も、田舎で独身生活の孤独を楽しむことだったが、『女王即位五十年祭の年に』の結末は、ギッシングの作品の中では、最も幸福な家庭を描いている。タラントの文筆業も順調で、家事に関しては信頼できるメアリの存在があり、さらにナンシーが財産を受け取って、郊外に家をもつ見通しも立つ。それでいながら、タラントは別居結婚を続けるつもりで、ナンシーが愛情の絆を確認する場面で作品は終わる。つまり、経済的なゆとりと、子供を愛し、夫のわがままを許容する妻の存在こそが、結婚生活の理想なのである。

しかし、それなりの幸福な結末を提示しながらも、この作品の読後感は決して明るくはない。ナンシーの両親、弟とファニー、エイダとピーチーら、ナンシー以外の結婚生活はすべて不幸であり、ナンシーの幸福も妥協によるものである。家庭の外では、消費文化がますます栄え、旧来の価値体系が崩れながら

も、相変わらず家庭内の女性たちは昔ながらの妻と母の役割を期待されている。ナンシーとタラントの家庭の砦が、社会の俗悪な力を防ぐほど強固なものかは疑問である。結婚生活の成功の秘訣が、妻がおとなしく別居生活を受け入れることでしかないとすれば、家庭の幸福とは、男女の愛の限界を理性的に受け止めるという諦観に基づくものとなる。「幸福な結末」は、俗化する社会の脅威と人間の卑俗さに対する侮蔑から生じる、作品全体をおおう苦さを拭いきれないのではないだろうか。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、三作品を通して結婚の描写を見てきたが、結婚生活の様々な不幸や、結婚できない男女の孤独を通して、ヴィクトリア朝末期の結婚制度自体の矛盾がリアルに描かれている。社会的弱者としての女性の苦悩も見事に表現されているが、女性の自己主張は、結局は幸福な家庭を損なうものでしかない。ギッシングは結婚制度の矛盾を示しつつも、女性主導の家族関係には否定的である。大衆社会における物質主義の蔓延と道徳性の喪失に対する批判的視線が、彼自身の個人的な苦悩に裏付けられ、伝統的な役割分担を超えた男女関係の理想像を不可能にしている。しかし、ギッシングの作品は、失われた崇高な精神性へのエレジーにとどまらない。価値観の変化を背景に描かれる結婚の苦い現実は、改めて、矛盾に満ちた日常における欲望の充足と自己実現の困難さを幾重にも問いかけるのである。

註

（1）Mona Caird, “Marriage,” *The Westminster Review* (August, 1888): 197. この記事以降、同年だけでも、結婚制度そのものを論じた記事が数点掲載されている。

（2）Marilyn Yalom, *A History of the Wife* (New York: Harper Collins, 2001) 268-69.

（3）Joan Perkin, *Women and Marriage in Nineteenth-Century England* (London: Routledge, 1989) 225.

（4）John R. Gillis, *For Better, For Worse: British Marriages, 1600 to the Present* (Oxford: Oxford UP, 1985) 231- 59.

（5）Lee Holcombe, *Wives and Property* (Oxford: Martin Robertson, 1983) 49.

（6）一八五七年以降は、どの階級でも離婚請求が可能になり、離婚法制定後の十年間で労働者階級からの申し立てが二割から三割、妻からの申し立ても四割になったという。A. James Hammerton, *Cruelty and Companionship: Conflict in Nineteenth-Century Married Life* (London: Routledge, 1992) 103.

（7）ただし、普通法の他に衡平法があり、父親などが衡平法を適応すべく手続きをすれば、結婚後も女性に一定の財産権を与えられた（Perkin 15-19）。

（8）ただし、真に平等な親権が与えられたのは一九二五年の児童保護法以降だった（Holcombe 54）。

（9）Pat Jalland and John Hooper, *Women from Birth to Death: The Female Life Cycle in Britain 1830-1914* (Brighton: Harvester, 1986) 117.

（10）Jalland and Hooper 117. 親の代が築いた生活と同水準から新婚生

活をスタートしようとする場合が多く、男性個人の職業収入よりも親から受継ぐ資産が重要視されたとパット・ジャランドは、Pat Jalland, *Women, Marriage and Politics 1860-1914* (Oxford: Clarendon,1986) 71-72 で指摘する。

(11) Jane Lewis, *Women in England 1870-1950: Sexual Divisions and Social Change* (Brighton: Wheatsheaf, 1984) 3.

(12) Martha Vicinus, *Independent Women: Work & Community for Single Women 1850-1920* (Chicago: U of Chicago P, 1985) 23.

(13) 川本静子「『新しい女』の『新しさ』」『ヒロインの時代』（川本静子・北條文緒編、国書刊行会、一九八九）一〇頁。

(14) Lee Holcombe, *Victorian Ladies at Work: Middle-Class Working Women in England and Wales, 1850-1914* (Newton Abbot, Eng.: David and Charles, 1973) 117.

(15) Susan Colón, "Professionalism and Domesticity in George Gissing's *The Odd Women*," *English Literature in Transition* 44.4 (2001): 441.

(16) Deidre David, "Ideologies of Patriarchy, Feminism, and Fiction in *The Odd Women*," *Feminist Studies* 10.1 (Spring 1984): 119.

(17) この作品は『余計者の女たち』と思われるが、その執筆は八月以降だという。

(18) 出版社の意向もあって、初めの『ミス・ロード』という題名を変えてよかったとも述べている。

(19) Leonore Davidoff, et al., *The Family Story: Blood, Contract and Intimacy 1830-1960* (London: Longman, 1999)128.

(20) Molly Youngkin, "All she knew was, that she wished to live": Late-Victorian Realism, Liberal Feminist Ideals, and George Gissing's *In the Year of Jubilee*," *Studies in the Novel* 36.1 (Spring 2004): 61-62.

(21) Cf. Llyod Fernando, "*New Women*" *in The Victorian Novel* (University Park: Pennsylvania State UP, 1977) 121.

(22) 例えば、Elaine Showalter, *Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* (New York: Penguin, 1987) 124-25 には、女性の思春期の知的訓練が生殖機能を損なう危険性について指摘されていたことが述べられている。